

# 成人期知的障害者における重要な他者への意識に関する調査

—— 重要な他者へのポジティブ・ネガティブ感情の発達における ——

李 受眞\*・橋本 創一\*\*・春日井 宏彰\*\*\*・前川 涼\*\*\*・尾高 邦生\*\*\*\*

(2017年11月21日受理)

LEE, S., HASHIMOTO, S., KASUGAI, H., MAEKAWA, R. and ODAKA, K.; Consciousness of Significant Others in Adults with Intellectual Disabilities: Development of Positive and Negative Emotions towards Significant Others.

ISSN 1349-9580

We examined the positive and negative emotions of adults with moderate and mild intellectual disabilities (N=22) towards their significant others or those who were important and close to them. We used data from welfare services for adults with disabilities. We interviewed the subjects in a private setting and asked them several questions regarding recognition of their significant others and if they felt any positive or negative emotions towards them. We found that persons with mild intellectual disabilities were more aware of the existence of "the praised significant others" than those with moderate intellectual disability. Some of the subjects said that they felt both positive and negative emotions towards the significant others. When recognizing their significant others, the subjects mainly paid attention to their internal qualities. The results indicated that people with moderate and mild intellectual disabilities focus on the positive aspects of others but tend to overlook the negative aspects. It can be concluded that there is a bias towards some people over others. These findings are expected to contribute to the existing studies on the subject.

KEY WORDS : Intellectual disability, Adults, Self, Positive and Negative Emotions, Significant Others

\* Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

\*\* Center for the Research and Support of Educational Practice, Tokyo Gakugei University

\*\*\* Social Welfare Corporation KAZUEDA FUKUSHIKAI

\*\*\*\* School for children with Disabilities attached to Tokyo Gakugei University

## 1. 問題

近年、障害者における生涯学習の必要性から平成29年文部科学省<sup>1)</sup>では学校卒業後も生涯を通じて教育や文化、スポーツなどの様々な機会に親しむことができるよう、「障害者学習支援推進室」が中心となって、切れ目ない支援体制の整備等に取り組んでいる。

生涯発達の観点からみると、人は中年期にこれまでのアイデンティティに揺らぎを感じ、「自分は何者か」「他者の役に立っているのか」を問い直し、青年期とは違い、アイデンティティの再体制化が起こる(岡本, 2002)<sup>2)</sup>。発達期の知的障害児童生徒に比べ、成人期の知的障害者は仕事や生活により経験が豊富であり、それに伴って自己概念と他者との関わりにおいてより豊かに発達・分化

\* 東京学芸大学大学院教育学研究科

\*\* 東京学芸大学教育実践研究支援センター 教育臨床研究部門

\*\*\* 社会福祉法人 和枝福祉会

\*\*\*\* 東京学芸大学附属特別支援学校

していく。杉田 (2013)<sup>3)</sup> は生涯発達の観点からみて中年期の知的障害のある人の自己認識について、学齢期に知的障害を認識していたが、その後、社会との関わりのなかで、自己肯定感を積み重ね、それに伴って「障害者」という自分の枠組みに揺らぎを感じ新しい障害観、自己認識を獲得していたことを示した。

一方で、自己概念の形成には、本人の視点と同様に他者の視点が存在することが指摘されている (Bracken, 1996)<sup>4)</sup>。さらに、小島 (2010)<sup>5)</sup> によると、他者のことをより強く意識している知的対象児ほど、自己についてより語る事ができる。自己と他者の関係は児童だけでなく、青年期である大学生にとっても重要である (豊田・森田・岡村・稲森, 2008)<sup>6)</sup>。しかし、成人期における自己と他者の関係について調べた研究はあまりされていない。

他者を意識することは自己概念の形成にもつながると考えられるが、単純に他者を意識化することにとどまらず、他者との対立や他者への批判は、意図や期待、考え方における自他の相違から生じるものであり、自他の固有性を明確化することと密接に関連する (守屋ら, 1972)<sup>7)</sup>。また、山本・小松 (2016)<sup>8)</sup> は他者へのネガティブな情動を伴う相互作用や関連付けが、子どもが自分の視点を明確にする一つのきっかけになっている。他者へのネガティブな情動を意識化させることは、他者との関係において自己の視点を明確化するチャンスになるともいえることを示唆している。

しかし、他者へのポジティブな面とネガティブな面のどちらかに偏っているのではなく、両方の状況を有することが大事だと考えられる。これに対し、今野 (1995)<sup>9)</sup> はダウン症児の内面の発達に関する事例研究で、他者に対し、励まし、批判、謝意などが認められることで、他者に関する感情である自我感情、社会的感情が小学一年生以降豊かに分化・発達していることが示された。

## 2. 目的

そこで本研究では、成人期障害者福祉サービス事業を利用する知的障害者を対象として、自身にとって重要な他者へのポジティブ・ネガティブ感情について検討することを目的とする。知的障害者の自分の中での他者の在り方について明らかにすることで、自己理解を促すための今後の支援に役立てていきたいと考える。

## 3. 方法

### 3.1 調査対象

A県にある生活介護施設 (通所) を利用する成人期の中度・軽度知的障害者22名 (平均CA=47.2歳, SD=7歳, 男性=7名, 女性=15名) を対象とした。

### 3.2 手続き

静かな個室にてインタビュー調査を行った。自身にとって重要な他者を視覚的に想起しやすいように想定されるイラスト (家族, 友人, 職員など) を用意した。

### 3.3 調査内容

他者意識の発達がどのように感情の側面に影響しているかに関する尺度を用いた。自分にとって重要な他者へのポジティブ・ネガティブ両方の状況で意識化することについて尋ねるために小島 (2010)<sup>5)</sup> の質問に基づき、10個の質問項目を設けた。質問内容としては、重要な他者に対する認知と他者に対する評価を聞く質問、ポジティブ・ネガティブの感情の側面に関する質問がある。詳細な項目の内容はTable1に示す。

Table 1 インタビューの質問項目

1	本人に対して一番ほめられてうれしい人は誰ですか？
①	それはどんな人ですか。
②	どのぐらいの頻度でほめられていますか。
③	その人の好きなおところやいいところがありますか。ないですか。それはどういうところですか。
④	その人に直してほしいところがありますか。ないですか。それはどういうところですか。
2	本人に対して一番怒られて悲しい人は誰ですか？
①	それはどんな人ですか。
②	どのぐらいの頻度で怒られていますか。
③	その人の好きなおところやいいところがありますか。ないですか。それはどういうところですか。
④	その人に直してほしいところがありますか。ないですか。それはどういうところですか。

1, 2は重要な他者を問う質問で、より想起しやすくするために、父, 母, 担任教諭, 恋人, 友人の絵を提示した。①は重要な他者に対してどのように認知しているかについて尋ね、その対象者からどの程度褒められ (怒られ) ているか, 4件法 (①いつも, ②時々, ③めったに,

④まったく)にて選択させた。また、重要な他者のポジティブなところ(③)とネガティブなところ(④)について尋ねた。

#### 4. 結果

##### 4.1 中度知的障害者と軽度知的障害者の比較

知能指数に基づき、対象者を中度知的障害者群(M=41.27, SD=3.86)と軽度知的障害者群(M=58.91, SD=5.55)に分けた。中度知的障害者群は11名(男性3名, 女性8名), 軽度知的障害者群も11名(男性4名, 女性7名)で同じ人数であった。

中度知的障害者群は「重要な他者(賞賛)」について、施設の職員を選んだ人は82%(9人), 施設職員と恋人を選んだ人は9%(1人)で、いないと答えた人も9%(1人)であった。それに比べ、軽度知的障害者群は施設の職員を選んだ人は36%(4人)で中度知的障害者群より少なく、次に施設職員・友人(27%, 3人), 友人(18%, 2人), 親(9%, 1人), いない(9%, 1人)の順が多かった。軽度知的障害者群は中度知的障害者群より「重要な他者(賞賛)」の存在が多様であった。Figure 1に「重要な他者(賞賛)」の軽度知的障害者群と中度知的障害者群と全体の割合のグラフを示す。

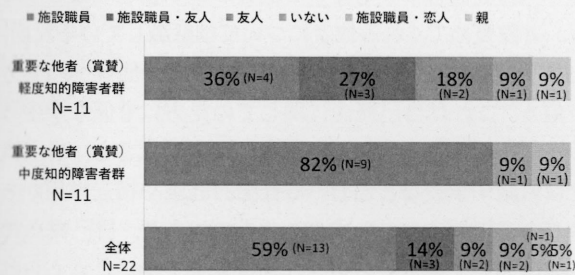


Figure 1 「重要な他者(賞賛)」の軽度知的障害者群と中度知的障害者群と全体の割合

一方、「重要な他者(叱責)」では、中度知的障害者群で親, 施設職員, いないと答えた人がそれぞれ27%(3人), 友人, 恋人と答えた人がそれぞれ9%(1人)であった。軽度知的障害者群では、親を選んだ人が45%(5人)で一番多く、次に施設職員(27%, 3人), いない(18%, 2人), 友人(9%, 1人)の順で回答が多く得られた。「重要な他者(叱責)」では、両方の群で親を重要な他者として選んだ人が多く占められ、「重要な他者(賞賛)」と明確な違いがみられた。

Figure 2に「重要な他者(叱責)」の軽度知的障害者群と中度知的障害者群と全体の割合のグラフを示す。さらに、「重要な他者(賞賛)」の質問では「いない」と

えた人が9%(2人)であったことに比べ、「重要な他者(叱責)」への質問では23%(5人)もいた。

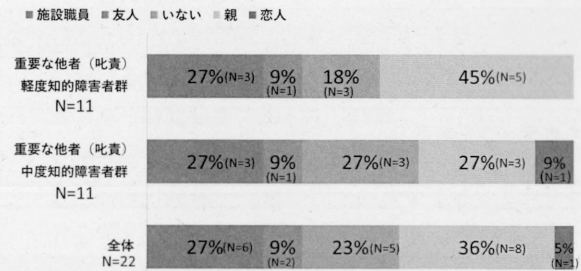


Figure 2 「重要な他者(叱責)」の軽度知的障害者群と中度知的障害者群と全体の割合

##### 4.2 重要な他者へのポジティブ・ネガティブ感情と他者との関係

重要な他者におけるポジティブなところとネガティブなところに対して両方とも「ある」と答えた人は少なかった。「重要な他者(賞賛)」と「重要な他者(叱責)」のどちらかにポジティブなところとネガティブなところ両方とも「ある」と答えた人は22人中4人であった(賞賛・叱責2人, 賞賛のみ1人, 叱責のみ1人)。

「重要な他者(賞賛)」でポジティブ・ネガティブなところのどちらも「ある」もしくは「ない」と答えた人, それぞれ3人であった。一方で、ポジティブなところは「ある」と答えたが、ネガティブなところは「ない」と答えた人は13人で圧倒的に多かった。その他には、褒められてうれしい人がいないと答えた人が2人, ポジティブなところはわからないが、ネガティブなところはないと答えた人が1人で計3人であった。

「重要な他者(叱責)」でポジティブ・ネガティブなところのどちらも「ある」と答えた人は3人, どちらも「ない」と答えた人は2人, ポジティブなところはあるが、ネガティブなところはないと答えた人は9人で「重要な他者(賞賛)」よりも少なかった。その他には怒られたら悲しい人がいないと答えた人が5人, ポジティブなところはわからないが、ネガティブなところはないと答えた人2人, ポジティブなところはないが、ネガティブなところはわからないと答えた人が1人で計8人であった。

「重要な他者(賞賛・叱責)」のポジティブ・ネガティブなところについて答えた人数をTable 2に表す。

Table 2 「重要な他者（賞賛・叱責）」のポジティブ・ネガティブなところを答えた人数

「重要な他者（賞賛）」		
	ポジティブ「ある」	ポジティブ「ない」
ネガティブ「ある」	3	0
ネガティブ「ない」	13	3
その他	3	
「重要な他者（叱責）」		
	ポジティブ「ある」	ポジティブ「ない」
ネガティブ「ある」	3	0
ネガティブ「ない」	9	2
その他	8	

(単位：人)

#### 4.3 重要な他者への認知

重要な他者に対して「どんな人か」を聞く質問の回答をそれぞれの重要な他者に分けて分類した。

「重要な他者（賞賛）」では59%（13人）が施設職員を選んでおり、その中、一番多かった回答は「優しい（5人）」であった。その他にも「明るい」、「怖い」、「面白い」、「気難しい」といった内面的な特性に関する回答が多かった反面、「頑張ってる」、「おちょこちよい」といった行動の特性に関することや、「歯医者に連れてってくれる」「みんな怪我しないようにする人」「看護の人」などの相手の役割に関する答えもあった。

「重要な他者（叱責）」では親を選んだ人が36%（8人）で一番多かったが、「優しい」と答えた人は3人で、「怒ると怖い」と答えた人も3人であった。行動特徴としては、「お酒を飲んだら乱暴していた」、「ビールを飲んでいる人」、「ダメなところはダメとはっきり言ってくれる」といった回答もあった。27%（6人）の人は施設職員を選んでおり、「優しい」、「こわい」、「気難しい」、「面白い」、「厳しい」といった特徴が多かった。

#### 5. 考察

本研究では、中度知的障害者群と軽度知的障害者群における「重要な他者（賞賛）」と「重要な他者（叱責）」について比較を行った。その結果、軽度知的障害者群は中度知的障害者群より褒めてくれる重要な他者の存在が多様であったことから、より周囲の様々な他者について意識していることがわかった。今後は中度知的障害者に

対し、周囲の多様な他者へ意識を向けていく必要性があるだろう。

また、賞賛してくれる重要な他者より叱責する重要な他者の方が想起しにくいことがわかった。これは、他者のネガティブなところよりポジティブなところの方が想起しやすいともいえる。「重要な他者（叱責）」では、両方の群で親を重要な他者として選んだ人が多く占めており、「重要な他者（賞賛）」と明確な違いがみられた。一方で「重要な他者（叱責）」では軽度知的障害者群と中度知的障害者群とで重要な他者の割合がそれほど変わっていないことが示された。褒めてくれる他者が周囲にたくさん存在するのに比べ、叱責をする他者は限られているのではないかと考えられる。

次に、重要な他者へのポジティブ・ネガティブなところのどちらも「ある」と答えた人は少なく、圧倒的にポジティブなところは「ある」と答えており、ネガティブなところは「ない」と答えた人が多いことが明らかになった。「重要な他者（賞賛）」に比べ、「重要な他者（叱責）」でのポジティブなところは「ある」と答えたが、ネガティブなところは「ない」と答えた人が少なかった。さらに、「重要な他者（叱責）」では、「怒られて一番悲しい人がいない」と答えた人の数が23%（5人）も占めており、褒めてくれる他者より叱責する他者はより想起が難しかった。普段褒めてくれる他者については意識している反面、叱責する他者についての意識が弱いことは他者への見方が偏り、これは自己概念に関しての見方にも偏りが生じるかもしれない。Rosenberg (1981)<sup>10)</sup>によると、自己概念は家庭や学校などにおける社会的経験や相互作用から生じる要因によって形成されるものであり、自己概念の形成において他者との相互作用は重要であると考えられている。

重要な他者への認知としては「重要な他者（賞賛）」では内面的な特徴や行動の特性、役割に関する回答といったような様々なポジティブな特性がより見られた。一方、「重要な他者（叱責）」では内面的な特徴、行動の特性に関する意見がほとんどで、特性に関しては、ネガティブな特性について答えた人が多かった。

こうした結果は、中軽度の知的障害者が他者のポジティブなところへの注目が大きく、ネガティブな面を意識していないという偏った傾向を示していた。このように他者に対して一方の側面に偏った注目または意識を持っているということは、自己の発達にも影響が生じる可能性があると考えられる。これからは他者へ多様な視点ももてるような支援が期待される。

最後に本研究の課題について述べる。1つ目は、健常の成人期と比較する必要がある、その点において、本研

究で得られた結果が成人期全般の人々について示しているとは言い難いということである。2つ目は、自己概念と結び付けた調査を実施することで、自己と他者との関係についてより詳しく述べることができると考えられる。これらを踏まえて引き続き検討していくことが必要である。

#### 引用文献

- 1) 文部科学省: 障害者の生涯学習の推進について 2017.
- 2) 岡本祐子: アイデンティティ生涯発達論の射程, ミネルヴァ書房, 2002.
- 3) 杉田穂子: 中年期の知的障害のある人の自己認識の変化—生涯発達の観点からみて—, 青山学院女子短期大学紀要, 67, 73-88, 2013.
- 4) Bracken, B. A. : Clinical applications of a context-dependent, multidimensional model of self-concept. In B. A. Bracken(Ed.), Handbook of self-concept. John Wiley, New York, 453-503, 1996.
- 5) 小島道生: 知的障害児の自己概念とその影響要因に関する研究—自己叙述と選択式測定法による検討—, 特殊教育学研究, 48, 1-11, 2010.
- 6) 豊田弘司・森田泰介・岡村季光・稲森涼子: 大学生における他者意識と情動知能の関係, 教育実践総合センター研究紀要, 29-34, 2008.
- 7) 守屋慶子・森万岐子・平崎慶明・坂上典子: 児童の自己認識の発達—児童の作文の分析を通して— 教育心理学研究, 20, 205-215, 1972.
- 8) 山本真子・小松孝至: 児童の日記にあらわれる他者との関係のなかの自己—小学校4年生の日記の分析— 教育心理学研究, 64, 76-87, 2016.
- 9) 今野和夫: ダウン症児の内面の発達に関する研究—連絡帳の分析を通して—, 秋田大学教育学部研究紀要教育科学, 27-40, 1995.
- 10) Rosenberg, M. : The self-concept: Social product and social force. In M. Rosenberg, & H. Turner (Eds.), Social psychology: Sociological perspectives. New York: Basic Books, 593-624, 1981.